

宮城県文化財調査報告書第227集

宮城県文化財調査報告書第227集

観音堂山遺跡

觀音堂山遺跡

平成23年5月

宮城県教育委員会

平成二十三年五月 宮城県教育委員会

觀音堂山遺跡

序 文

ゆとりや豊かさを目指すことが重要になってきたなかで、地域住民の間では、身近な地域の個性豊かな風土や歴史的な文化財の保存・活用の取り組みへの気運が高まっています。

しかしその一方で、道路建設や大規模なは場整備、工業団地造成などの各種事業により、文化財は年々破壊され、消滅の危機にさらされることが多くなってきています。なかでも土地との結びつきの強い埋蔵文化財は、各種の開発により常に破壊される恐れがあることから、当教育委員会では開発部局に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発との係わりが生じた場合には貴重な文化財を積極的に保護することに努めてきております。

本書は、広域営農団地農道整備事業の関係機関との保存協議に基づき、広域農道の建設に先立って実施した刈田郡蔵王町観音堂山遺跡に関する発掘調査報告書です。本書が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、遺跡の保存に理解を示され、発掘調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成23年5月

宮城県教育委員会

教育長 小林伸一

例　　言

1. 本書は、宮城県大河原地方振興事務所が担当する広域営農団地農道整備事業「仙南2期地区」（白石一川崎線）に伴う観音堂山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。
3. 本書の第2図は、国土交通省国土地理院発行の「村田」「大河原」（縮尺1/25,000）の地形図を複製して使用し、第12図は、国土交通省国土地理院発行の「白石」（縮尺1/50,000）の地形図を複製して使用した。
4. 本書で使用した測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。なお、方位Nは座標北を表している。
5. 本書で使用した遺構略号は以下の通りである。
SI：堅穴住居跡 SK：土坑
6. 遺構平面図にはそれぞれスケールを付しているが、遺構縮尺は原則として1/50である。
7. 土色の記述にあたっては、『新版 標準土色帳 1996年版』（小山・竹原：1996）を用いている。
8. 遺物図版にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は原則として1/3である。
9. 遺物実測図では、土師器の黒色処理部分はスクリーントーンによって表現した。
10. 本書の遺構の整理は、初鹿野博之、小野寺淳一、古田和誠が行い、遺物の整理は、古田、長田由佳、加藤明日香、與名本京子が行った。
11. 本書の執筆・編集は、調査担当者の協議の後に古田が行った。
12. 本遺跡の調査成果については、すでに文化財保護課ホームページでその内容の一部を公表しているが、本書と内容が異なる場合は、本書がこれに優先する。
13. 発掘調査の記録や出土品は宮城県教育委員会が保管している。
14. 墨書き器については、宮城県多賀城跡調査研究所の吉野武氏にご教示いただいた。

目 次

序文

例言

目次

調査要項

第1章 遺跡の概要	1
1. 遺跡の位置と地理的環境	1
2. 周辺の遺跡	1
第2章 調査に至る経緯	3
第3章 調査の方法と成果	5
1. 調査の方法と経過	5
2. 基本層序	5
3. 発見された遺構と遺物	7
(1) 竪穴住居跡	
(2) 土坑	
(3) その他の出土遺物	
第4章 総括	12
1. 遺物について	12
(1) 縄文時代の出土遺物	
(2) S I 1 竪穴住居跡出土土器	
2. 遺構について	14
(1) S I 1 竪穴住居跡	
(2) SK 2 土坑	
3. まとめ	17

引用文献

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図 観音堂山遺跡の位置	1	第8図 S I 1 壁穴住居跡出土土器 (2)	10
第2図 観音堂山遺跡と周辺の遺跡	2	第9図 S K 2 土坑	10
第3図 調査区の位置と周辺の地形	4	第10図 確認調査時出土縄文土器	11
第4図 各調査地点の基本層序	5	第11図 カマド構築工程模式図	14
第5図 事前調査区造構配置図	6	第12図 カマドをもつ住居が検出された周辺遺跡	15
第6図 S I 1 壁穴住居跡	8	第13図 カマド全体が石組みで構築された住居	16
第7図 S I 1 壁穴住居跡出土土器 (1)	9		

表目次

第1表 全体が石組みのカマドをもつ住居属性表	17
------------------------	----

写真図版目次

写真図版1 観音堂山遺跡遠景・調査区全景	21	写真図版3 S I 1 壁穴住居跡出土土器 (1)	23
写真図版2 S I 1 壁穴住居跡・SK 2 土坑ほか	22	写真図版4 S I 1 壁穴住居跡出土土器 (2)・縄文土器	24

調査要項

遺跡名：観音堂山遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：05202）

遺跡記号：U Q

所在地：宮城県刈田郡蔵王町曲竹字観音堂山

調査原因：広域營農団地農道整備事業「仙南2期地区」（白石一川崎線）に伴う確認・事前調査

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査期間：確認調査・事前調査 平成22年9月6日～10月15日

調査面積：対象面積 - 約6,000m² 確認調査 - 約2,100m² 事前調査 - 約1,200m²

調査員：初鹿野博之 小野寺淳一 古田和誠

調査協力：宮城県大河原地方振興事務所 蔵王町農林觀光課 蔵王町教育委員会

第1章 遺跡の概要

1. 遺跡の位置と地理的環境

観音堂山遺跡は宮城県刈田郡蔵王町曲竹字観音堂山に所在する。本遺跡の所在する蔵王町は宮城県の南部、刈田郡の北東部にある（第1図）。蔵王町周辺の地形を概観すると、西部の奥羽山脈、東部の阿武隈山地、それらに挟まれた中央部低地帯からなっている。奥羽山脈は蔵王火山地とそれに連なる面白山地・二井宿山地や高館丘陵によって構成される。その山麓は緩やかに東方に延び、蔵王町と村田町周辺では南側に樹枝状に延びている。山脈や丘陵に挟まれた中央部低地帯は、白石川やその支流の松川・蔵川・児持川などの河川によって形成され、その流域には多くの段丘や扇状地性低地が細長く広がっている。蔵王町は、蔵王火山地とそこから派生した高館丘陵、松川・蔵川などの河川によって形成された段丘や沖積地で占められている。町の大部分は丘陵地で、松川によって大きく南北に二分される。このうち南側は蔵王火山群の東に位置する青麻山から派生した丘陵が緩やかに延びたもので、裾野には何本もの沢が入り、東西に延びる幾つかの小丘陵が形成されている。この丘陵上には各時代にわたる遺跡が数多く分布し、本遺跡もその一つである（第2図）。



第1図 観音堂山遺跡の位置

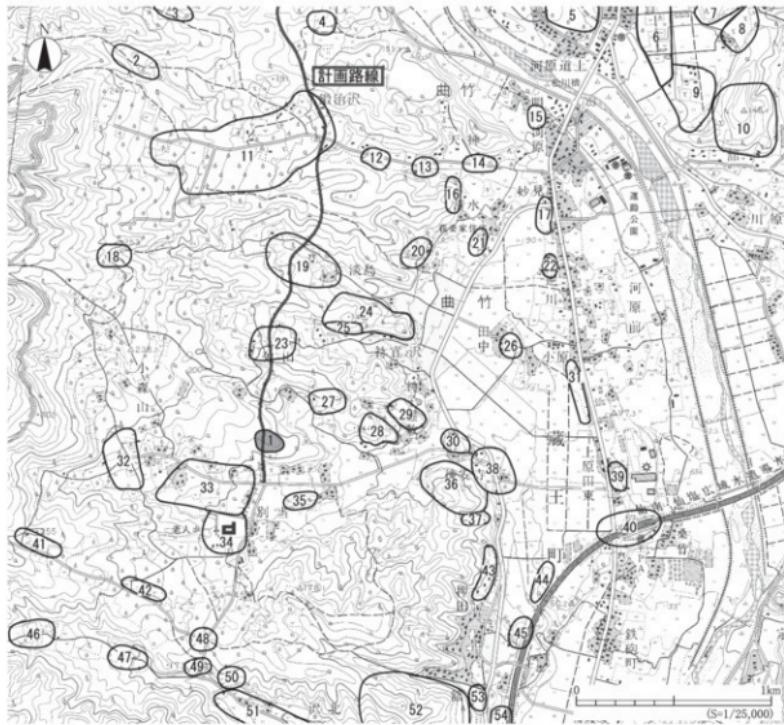
2. 周辺の遺跡

周辺の遺跡を概観すると、旧石器時代は遺跡がまばらで、松川流域の持長地遺跡（白鳥1971、黒川1980）でナイフ形石器が発見されている。

縄文時代の遺跡は、青麻山東麓部と蔵王山東麓部に延びる高木丘陵上に数多く分布する。早期の標識遺跡である松川流域の明神裏遺跡、中・後期の住居跡が多数発見された二屋敷遺跡（加藤ほか1984）、後・晩期の大規模な集落と推定される下別当遺跡・山田沢遺跡、晩期の扇状に配置された掘立柱建物跡が発見された鍛冶沢遺跡（千葉・小野2010）などがある。

弥生時代の遺跡は、蔵川流域の円田盆地に数多く分布する。鍛冶沢遺跡では、県内で初めて前期の再葬墓の状況が明らかとなった。西浦遺跡では、円田式の基準資料として設定された長頸壺が発見されている。

古墳時代の遺跡は、円田盆地の周縁部や白石市深谷地区に集中している。円田盆地南東周縁部の愛



遺構名	立地	種別	時代	番号	遺構名	立地	種別	時代
1 観音堂山遺跡	丘陵斜面	散布地	調文	28	若神子山遺跡	丘陵斜面	散布地	調文
2 朝日山北遺跡	丘陵斜面	散布地	調文(早・中・後)・奈良・平安	29	若神子山遺跡	丘陵斜面	散布地	調文(後)
3 小野入遺跡	丘陵斜面	散布地	調文(早・中・晚)・古墳	30	後安寺寺跡	丘陵斜面	散布地	古代
4 馬頭遺跡	丘陵斜面	散布地	調文(中)	31	遊行山遺跡	丘陵	散布地	調文(早・前)
5 西造遺跡	段丘	集落・散布地	調文(早・後)・弥生・(後)・平安	32	鷹行今瀬遺跡	丘陵	散布地・寺院	調文(早・中・後)・弥生・古墳・中世
6 東造遺跡	丘陵斜面	散布地	調文(中)	33	下別当山遺跡	丘陵斜面	散布地	調文(中・後)
7 上野遺跡	丘陵	散布地	調文(中)・御生・平安	34	小屋場遺跡	丘陵斜面	散布地	調文(後・晚)
8 東向山山頂跡	丘陵斜面	散布地	調文(中)・弥生・古代	35	下別当山下遺跡	丘陵斜面	散布地	調文(中・後)
9 下木野山遺跡	段丘	散布地	奈良・平安	36	船の山遺跡	丘陵	散佈地	中世
10 大原船跡	丘陵	礎跡	中世	37	中野八幡跡	丘陵斜面	散布地	調文(後)・古代
11 斎原代官跡	丘陵斜面	散布地	調文(早・中・後)・弥生・奈良・平安	38	青竹遺跡	丘陵	散布地	調文(後)・古代・中世
12 伊ノ代官跡	丘陵斜面	散布地	弥生・古代	39	上照田遺跡	段丘	散布地	調文(早・中)・古墳・古代
13 八井遺跡	丘陵斜面	散布地	調文(後)	40	下照田遺跡	段丘	集落	調文(前・後)・弥生・平安
14 向前遺跡	丘陵斜面	散布地	調文(早・後)・古代	41	森森山下遺跡	丘陵斜面	散布地	調文(後)・六代
15 白人棚庵古墳	段丘	古墳	中世	42	沢入遺跡	丘陵斜面	散布地	調文(後・晚)・弥生
16 游水遺跡	丘陵斜面	散布地	調文・弥生	43	方木山遺跡	丘陵斜面	散布地	古代
17 上照遺跡	段丘	散布地	調文(後)	44	中野日置跡	段丘	散布地	古代
18 立石遺跡	丘陵斜面	散布地	調文(後)	45	二屋敷遺跡	段丘	集落	印石器・調文(早・後・晚)・平安・中世・近世
19 滝島山遺跡	丘陵斜面	散布地	調文(後)	46	沢入山遺跡	丘陵	散布地	調文
20 岩瀬今瀬遺跡	丘陵斜面	散布地	調文(後)・六代	47	達森山山遺跡	丘陵	散布地	調文
21 紗見遺跡	丘陵斜面	散布地	調文(後)	48	沢入山遺跡	丘陵	散布地	調文(後)
22 下原遺跡	段丘	散布地	調文(中)	49	沢北遺跡	丘陵斜面	散布地	調文(後)
23 水川遺跡	丘陵斜面	散布地	調文	50	沢北遺跡	段丘	散布地	調文(後・晚)・弥生
24 道竹小屋形遺跡	丘陵	城塁	中世	51	山田北遺跡	丘陵斜面	散布地	調文(後・晚)
25 次山遺跡	丘陵斜面	散布地	調文(後)	52	山家遺跡	丘陵	城館	中世
26 小原遺跡	丘陵	散布地	調文(後)	53	梯方A遺跡	丘陵斜面	散布地	調文(後)
27 足の又遺跡	丘陵斜面	散布地	調文(後)	54	梯方B遺跡	段丘	集落	印石器・調文(前・後)・弥生・古墳・中世

第2図 観音堂山遺跡と周辺の遺跡

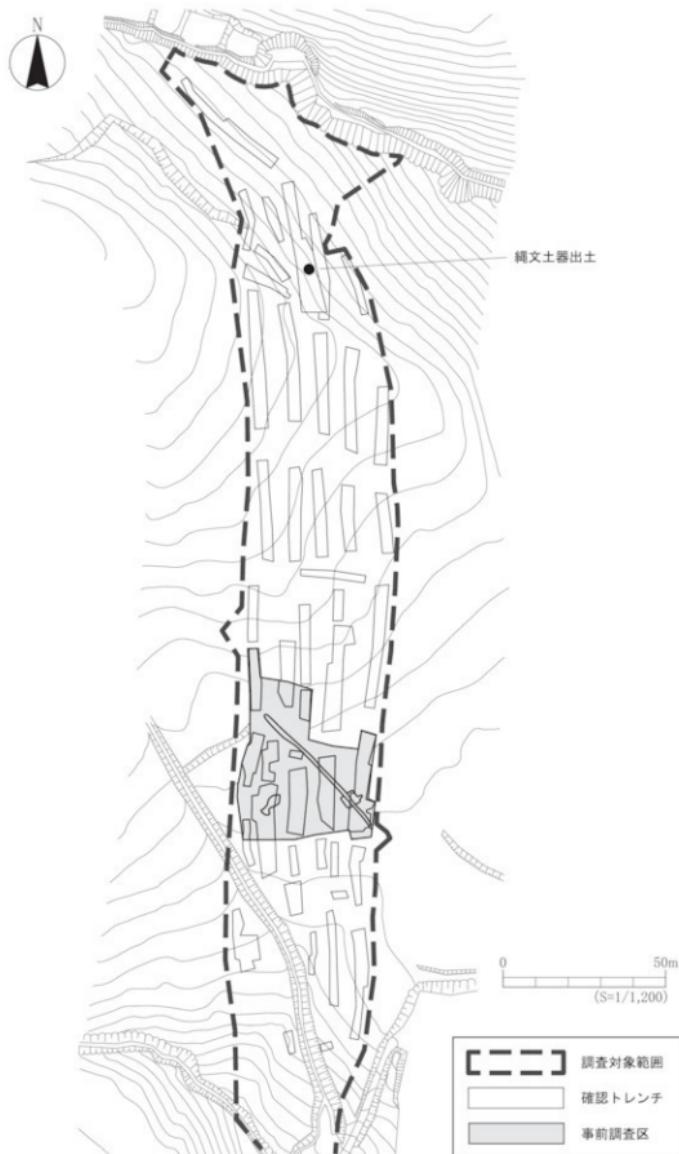
宕山丘陵に位置する前期塙釜式期の堅穴住居跡が検出された大橋遺跡（太田1980b）、中期南小泉式期の堅穴住居跡が検出された中沢A遺跡（佐藤2007）、後期栗圃式期の堅穴住居跡が検出された塙沢北遺跡（藤沼1971、小川1980a）などがある。

古代の遺跡は、古墳時代と同様に円田盆地周辺や深谷地区に多く分布する一方、青麻山東麓端部など広い範囲に分布する。愛宕山丘陵西麓部に位置する東山遺跡からは、石組みのカマドをもつ平安時代の堅穴住居跡と土器溜遺構が確認され、「万田」「子田」などの墨書き土器が大量に出土している（真山1981）。また、石組みのカマドをもつ平安時代の堅穴住居跡が、下原田遺跡（藤沼1971、森1981b）、二屋敷遺跡（林・藤沼1971、加藤ほか1984）や愛宕山丘陵西麓部に位置する赤鬼上遺跡（白鳥1971、阿部・黒川1980）などで検出されている。

中世は、青麻山東麓部に多くの館跡が築かれる。持長地遺跡では中世の掘立柱建物跡群が確認され、常滑系陶器、馬具などが出土しており、13世紀後半から14世紀前半頃の武家居館と推定されている（黒川1980）。青竹遺跡では掘立柱建物跡・柱列跡・溝跡によって構成される施設群が確認され、隣接する館の山城跡と一体を成す防御拠点であることが推定されている（佐藤2009）。

第2章 調査に至る経緯

宮城県では、主要作物の生産から加工、流通までを組織的に管理するために広域営農団地を計画し、その基幹的な農道となる広域農道の整備を進めている。蔵王町のある仙南地区ではこの広域営農団地農道整備事業に基づき昭和63年から川崎町一蔵王町一白石市を結ぶ広域農道（白石一川崎線）を整備してきた。観音堂山遺跡は平成20年度にルートを現地視察した際に、丘陵平坦面とその南斜面で縄文土器が採取され、新たに登録された遺跡である。地形的に広範囲で遺構が検出される可能性があることから、宮城県教育委員会、宮城県大河原地方振興事務所、蔵王町教育委員会で協議を行った。それにより、工事が遺跡に与える影響が大きいと判断したため、平成22年9月6日～9月21日に遺構や遺物の分布を把握するための確認調査を実施した。長さ2.9～34.1m、幅1.5～5.2mのトレンチを南北方向に47本設定した（第3図）。調査の結果、調査対象範囲南側の緩斜面で堅穴住居跡1軒、溝跡1条、炭窯跡1基が検出された。対象範囲北側では、縄文土器1点（第10図）が出土したほかは、縄文土器片、古墳時代から古代の土師器片、古代の須恵器片が数点出土した程度で、遺構や遺物包含層は検出されなかった。この結果を受けて、再び宮城県教育委員会、宮城県大河原地方振興事務所、蔵王町教育委員会で協議した結果、工法等の変更が難しいことから、遺構が検出された南側緩斜面について事前調査を実施することとなった。事前調査は平成22年9月22日から開始した。



第3図 調査区の位置と周辺の地形

第3章 調査の方法と成果

1. 調査の方法と経過

今回の調査区は南側に緩やかに下る緩斜面となっており、確認調査の結果をもとに、事前調査が必要とされた約1,200m²を対象とした（第5図）。

発掘調査は平成22年9月22日から開始した。重機による表土除去の後、遺構確認を行い、すでに検出されていた竪穴住居跡1軒、溝跡1条、炭窯跡1基のほかに、新たに土坑1基を検出し、精査を行った。精査の結果、溝跡は近現代の搅乱であることが判明した。また、炭窯跡は堆積土上部から針金が出土し、近現代の炭窯跡であると判断したため、写真記録のみに留めた。竪穴住居跡と土坑は平面図・断面図の実測を行い、10月15日にすべての作業を終了した。

調査区や遺構などの平面図作成には電子平板を使用し、竪穴住居跡のカマドについては1/10の縮尺で造り方測量を行った。断面図は1/20の縮尺で作成した。調査区での測量については、遺跡の南にある工事用基準杭を基準点にしている。基準点の座標（世界測地系第X系）は次の通りである。

基準点 X = -214004.063 Y = -17064.525 Z = 137.855

また、写真撮影には35mm一眼レフデジタルカメラ（1,210万画素）を使用した。

2. 基本層序

基本層序は地点によって異なる（第4図）。各層の堆積は以下の通りである。遺構はIV層またはVII層上面で検出している。

I層：現表土。主に黒褐色シルトで、腐食土である。

II層：砂。擾乱溝の周辺に堆積し、特に調査区南東部で厚く堆積する。

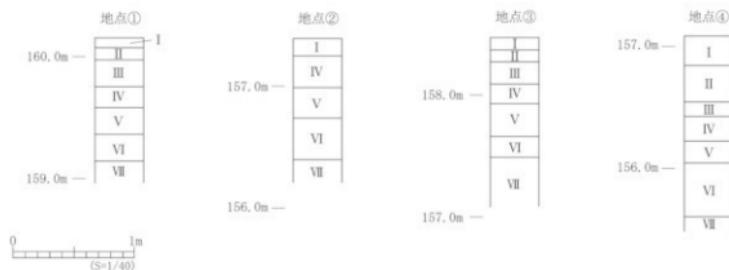
III層：主に黒色シルトの自然堆積層である。基本層地点②では堆積していない。

IV層：暗褐色粘土質シルトの自然堆積層である。

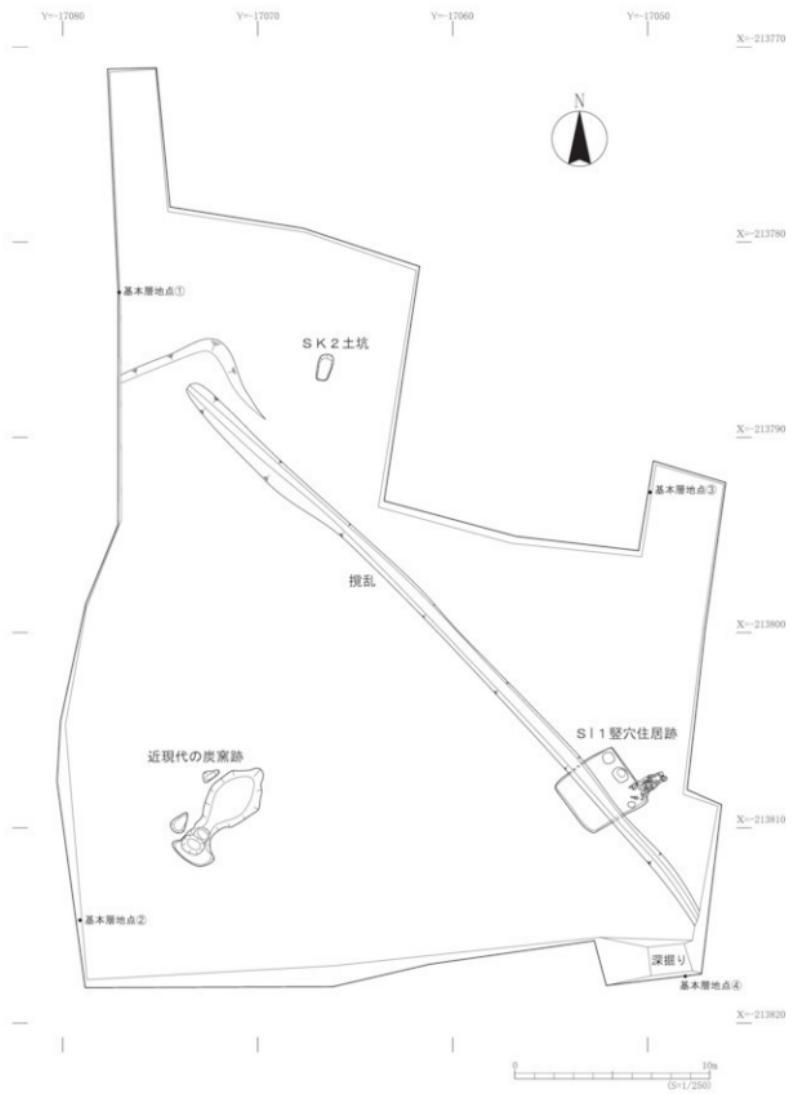
V層：褐色粘土質シルトの自然堆積層である。

VI層：主に黒褐色粘土質シルトの自然堆積層である。基本層地点①と基本層地点③を結んだラインより北側には堆積しない。調査区の南側で厚く堆積する。

VII層：黄褐色粘土で、下部に礫を多く含む。



第4図 各調査地点の基本層序



第5図 事前調査区遺構配置図

3. 発見された遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

【S I 1 竪穴住居跡】(第6図)

〔位置〕 調査区の南東部である。

〔検出面〕 IV層・V層上面

〔重複関係〕 重複はない。

〔平面形・規模〕 南西-北東方向約3.5m、南東-北西方向約3.2mの隅丸方形を呈し、面積約11.2m²である。

〔方向〕 北東辺でみると北で西に約38° 傾る。

〔壁の残存〕 壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は最も残りの良い北西辺で、床面から高さ約0.5m残存する。

〔堆積土〕 3層に分けられ、自然堆積である。3層は炭化材・焼土を多く含む黒褐色シルトで、火災直後に堆積したものと考えられる。北西側の床面付近から炭化材がまとまって出土している。2層は暗褐色シルトで、遺物をやや多く含む。1層は黒色シルトである。

〔床面〕 地山ブロック（VI層・VII層由来）を多く含む掘り方埋土を床面とし、硬化している。

〔カマド〕 住居北東辺の東隅に付設される。カマドは燃焼部両側壁や煙道部の構築に大形の礫を用いている。燃焼部底面は幅約0.6m、奥行き約0.5mの範囲で強く焼けて赤変・硬化している。

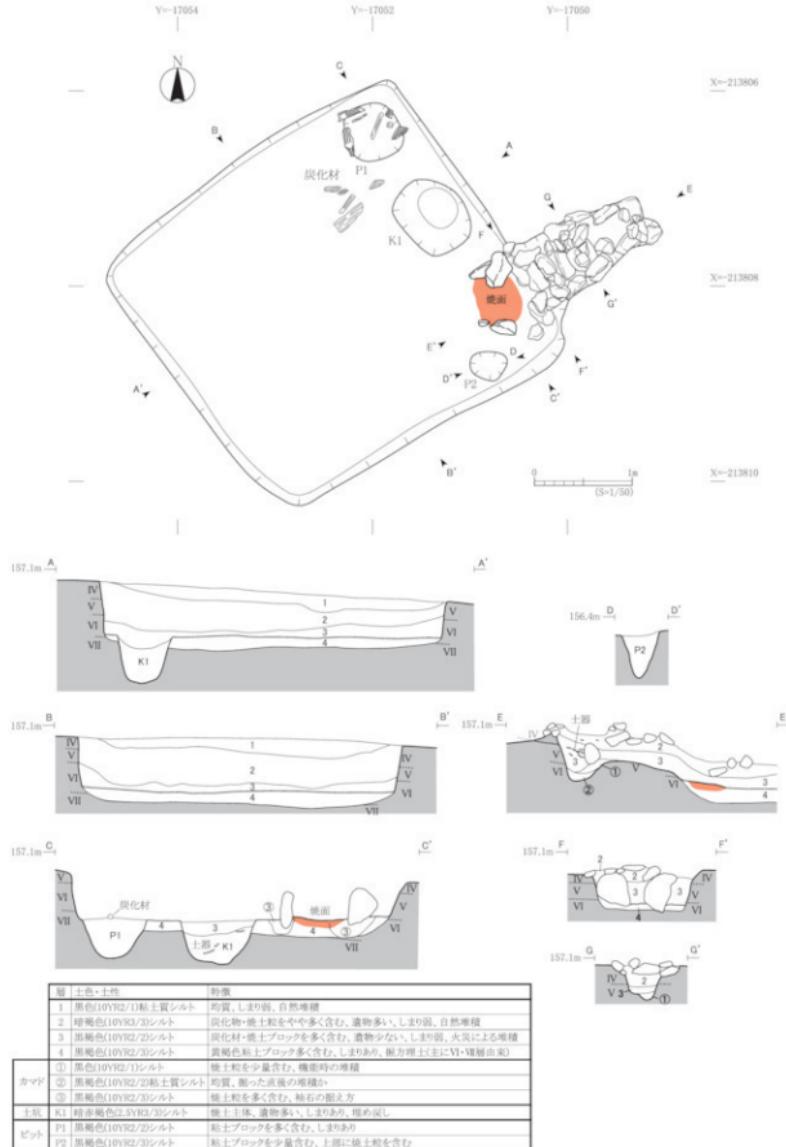
燃焼部側壁は、左壁で1点、右壁で3点の礫を立てて据えており、これらの据え方埋土に焼土ブロックを含むことから、ある程度使用した時点でカマドの作り替えが行われたと考えられる。礫の配置から、焚口は煙道方向に対してやや西側（住居中心側）を向いていた可能性がある。側壁の礫の上には扁平な礫が配置され、燃焼部に落ち込んでいる礫は天井に用いられていたものと考えられる。

カマド奥壁には、平板で大形の礫2点を住居の壁に立てかけるように設置し、その間を煙道の入り口としている。燃焼部から煙道部入り口にかけて設置されている礫は被熱が顕著である。側壁の一部（奥壁寄り）の礫は粘土で覆われているが、その他の礫は芯材としてではなく、直接壁や天井として機能していたと考えられる。燃焼部天井のおおよその高さは、床面から0.8mである。

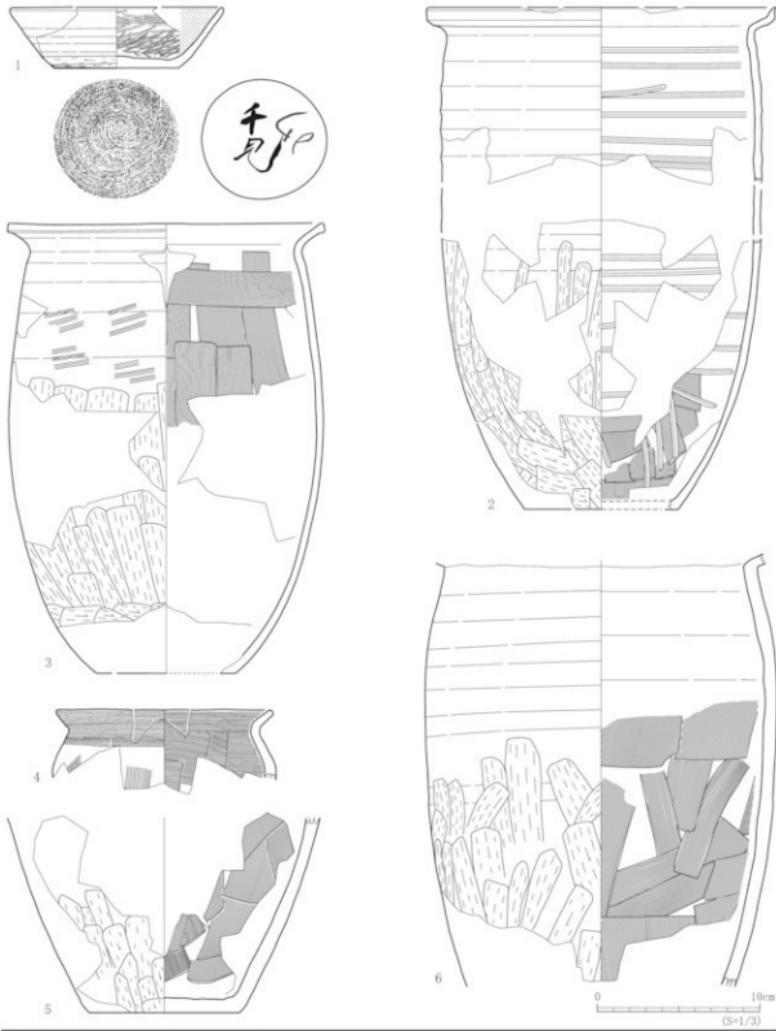
煙道は上幅約0.7m、下幅約0.3m、長さ約1.4mで、底面は燃焼部より0.1~0.2m高くなる。煙道は地山を構造に掘りくぼめ、両脇に礫を据え、その上に平板な礫を配してトンネル状にしている。煙道の先端部には直径約0.3mの煙出しのピットがあり、ピットの底面は煙道の底面より約0.2m深くなっている。煙出しピットの底面からは土師器甕2個体が出土しており、煙出しピットで使用されていたと考えられる。

〔周溝〕 検出していない。

〔貯蔵穴〕 カマド左側の北東側ほぼ中央でK 1が検出された。長径約0.8m、短径約0.6mの楕円形で、深さは床面から約0.4mある。焼土主体の土で埋め戻されており、上部は住居堆積土3層が流れ込んでいる。

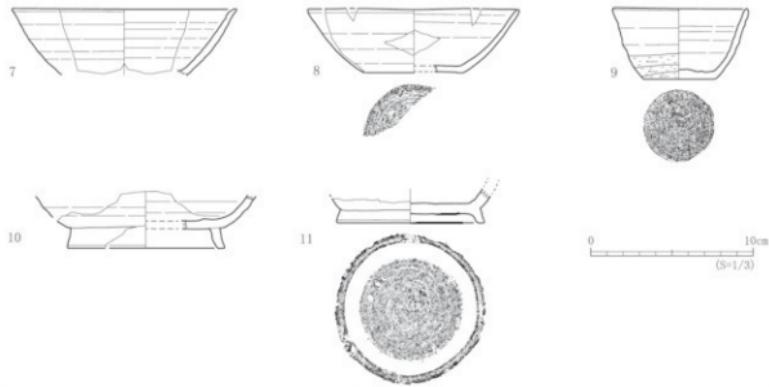


第6図 SI 1 積穴住居跡



No.	器種	層	法量			特徴	現存	写真	
			口径	底径	高さ				
1	土師器	坪	堆積土2層	13.0	7.6	3.7	外:ロクロナデ→凹輪・ヘラケズリ 底面:凹輪・魚紋→凹輪・ヘラケズリ、墨書きあり 内:ヘラミガキ→黒色処理	1/3	3-1
2	土師器	坪	堆積出しビット	21.4 (9.5)	21.4 (9.5)	31.0	外:ロクロナデ→ヘラケズリ 底面:不明 内:ヘラナデ→沈殿状のナデ	1/5	3-3
3	土師器	甕	K1+カマド内3層	19.6 (8.5)	—	27.7	外:平ガタタキ→ロクロナデ→ヘラケズリ 内:ロクロナデ→ヘラナデ	1/6	3-4
4	土師器	甕	堆積土3層	13.3	—	—	外:ココナデ・ハケメ 内:ヘラナデ→ココナデ	一部	4-1
5	土師器	甕	陶力瓦埋土	—	(9.3)	—	外:ヘラケズリ 内:ヘラナデ	一部	3-5
6	土師器	甕	堆積出しビット	—	—	—	外:ロクロナデ→ヘラケズリ 内:ロクロナデ→ヘラナデ	部	3-6

第7図 S-1 堪穴住居跡出土土器 (1)



No.	器種	層	法量			特徴	残存	写真
			口径	底径	高さ			
7	須恵器 壺	K1	—	—	—	内・外:ロクロナゲ	一部	4-2
8	須恵器 壺	K1+堆積土3層	13.8 (7.6)	4.3	—	内・外:ロクロナゲ 底面:回転角切刃	一部	4-3
9	須恵器 小型壺	堆積土3層	8.2 (6.0)	3.8	—	外:ロクロナゲ・回転角切刃 底面:回転角切刃 内:ロクロナゲ	完形	3-7
10	須恵器 高台壺	SII直横縦部底	— (9.6)	4.4 (4.3)	—	内・外:ロクロナゲ 底面:一付切刃+高台	一部	4-4
11	須恵器 壺	SII直横縦部底	— (9.1)	— (9.1)	—	外:ロクロナゲ? 底面:回転角切刃、底面に擦り面あり	一部	4-5

第8図 S11堅穴住居跡出土土器 (2)

〔ピット〕床面で2個のピットが検出された。住居東隅付近に位置するP1は、掘り方は径0.3~0.4mの不整円形で、深さは床面から約0.5mあり、埋土には地山ブロック（Ⅷ層由来）を多く含む。住居西隅に位置するP2は、1辺0.5~0.6mの隅丸方形で、地山ブロックを少量含む。

〔出土遺物〕(第7・8図)

床面からは土師器・須恵器の小破片が出土したのみで、大半はカマド内と住居内堆積土から出土している。カマドの煙出しピットからロクロ調整の土師器壺（第7図-2・6）、貯蔵穴からロクロ調整の土師器壺（第7図-3）、須恵器壺（第8図-7・8）、掘り方埋土からロクロ調整の土師器壺（第7図-5）、住居内堆積土から底面に墨書「千見」、「内」（異筆）が施されたロクロ調整の土師器壺（第7図-1）、非ロクロ調整の土師器壺（第7図-4）、須恵器小型壺（第8図-9）、確認面から須恵器高台壺（第8図-10）、須恵器壺（第8図-11）が出土している。

(2) 土坑

【SK2土坑】(第9図)

〔位置〕調査区の北西部である。

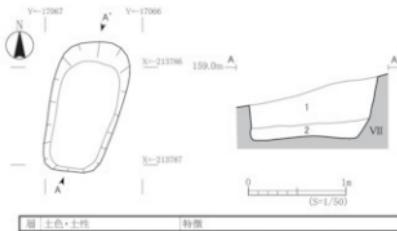
〔検出面〕Ⅷ層上面

〔重複〕重複はない。

〔規模・形態〕平面形は、長径1.3m、短径0.7m

の楕円形を呈する。深さは確認面より0.6m

である。



層	土色・土性	特徴
I	褐色(10YR2/3)粘土質シルト	堆積粘土ブロックを含む、しまり弱、自然堆積
II	褐色(10YR4/4)粘土質シルト	Ⅷ層の流れ込み、しまり弱

第9図 SK2土坑

〔壁・底面〕底面はほぼ平坦で、壁は底面から急に立ち上がる。断面形は逆台形状を呈する。

〔堆積土〕堆積土は2層に分けられる。1層は地山ブロック（Ⅶ層由来）を含む暗褐色粘土質シルトで、2層は崩落土でⅧ層主体である。いずれも自然堆積である。

〔遺物〕出土していない。

(3) その他の出土遺物

確認調査時に、対象範囲北側の緩斜面でⅢ層から縄文土器1個体がまとまって出土した（第10図）。平縁で体部下半から底部にかけてややすぼまる大型の深鉢である。口縁部にミガキが施された幅広の無文帯をもつ。体部にLR縄文を施文し、無文帯との境に沈線を引き、無文帯にミガキを施し、沈線を引き直している。体部下半もミガキが施されている。

その他に、縄文時代後期から晩期の土器小破片や古墳時代前期の土師器壺の口縁部小破片が表土から出土している。



No.	器種	層	寸法			特徴	残存	写真
			口径	底径	高さ			
1	深鉢	Ⅲ層	(36.0)	(13.7)	(51.5)	縄文(LR)→沈線→ミガキ→沈線引き直し	1/3	4-6

第10図 確認調査時出土縄文土器

第4章 総括

1. 遺物について

出土した遺物には、縄文土器、古墳時代の土師器、古代の土師器（环・甕）、須恵器（环・高台环・壺）があり、整理用コンテナで4箱程度である。その中で図示できたものは、確認調査時に出土した縄文土器1点とS I 1堅穴住居跡から出土した土器11点にすぎない。遺物の出土量が少ないため、土器の分類はせずに、個別にその特徴や周辺遺跡などの類例から年代の検討を行っていくこととする。

(1) 縄文時代の出土遺物

図示できたものは、縄文土器1点（第10図）のみである。胴部でやや膨らむ大型の深鉢で、口縁部に横位双線で区画される約9.3cmの幅広の無文帯をもつ。二屋敷遺跡（加藤ほか1984）や仙台市六反田遺跡（田中1981・佐藤1987）出土の後期前葉の土器には、類似した器形の粗製土器がみられるが、口縁部無文帯の幅は、幅の広いものでも5cm程度である。文様帯の幅に違いがあるものの、器形の共通性を重視し、後期前葉に位置付けられる粗製土器として考えたい。

(2) S I 1堅穴住居跡出土土器

遺物はカマド、貯蔵穴、堆積土などから出土している。住居に伴うものとしてはカマドの煙出しビットや貯蔵穴から出土したものがある。堆積土3層は火災直後の堆積であり、住居の機能年代と大きな時間差はないと考えられる。また、堆積土2・3層から出土した土器とカマド・貯蔵穴から出土した土器とで相互に接合関係が認められることや遺物の様相に大きな差異が認められないことから、住居に伴うものとまとめて扱うこととする。

出土した遺物は土師器环1点（第7図-1）、非ロクロ調整の土師器甕1点（第7図-4）、ロクロ調整の土師器甕4点（第7図-2・3・5・6）、須恵器环2点（第8図-7・8）、須恵器小型环1点（第8図-9）である。

土師器环はロクロ調整で、器形は体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁部は外傾する。底部の切り離しは回転糸切りで、体部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリの再調整が施されている。内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

非ロクロ調整の土師器甕は、口縁部から体上部にかけての破片資料である。口縁部が短く外傾し、体部上半にやや丸みをもつ。器面調整は、外面では口縁部ヨコナデ、頸部から体部は綫方向のハケメ、内面では口縁部ヨコナデ、頸部から体部はヘラナデが施されている。

ロクロ調整の土師器甕は、器形はいずれも長胴形である。全体の大きさがわかる2と3をみると、口径が21.4cmと19.6cm、器高が31.0cmと27.7cmで、大型である。2は、口縁部は強く外反し、口縁端部は上方につまみ上げられており、最大径が口径に位置する。3は、胴部にやや膨らみをもち、口縁部は「く」の字形に外傾する。器面調整は主に、外面ではロクロ調整の後に体部下半に手持ちヘラケズリが施され、内面ではヘラナデの再調整が施されている。2は、内面全体に沈線状のナデが施さ

れている。この沈線状のナデは、工具の木口を器表面に当てて調整を施したものであると考えられ、口縁部から体部上半にかけてはロクロの回転を利用し、体部下半では手持ちで行われている。3は、外面の体上部にロクロ調整前の平行タタキの痕跡がみられる。

須恵器坏は、いずれも器形は底部から内湾ぎみに立ち上がり、口縁部から体部にかけて直線的に外傾する。器面調整は内外面ともロクロ調整である。8は底部の切り離しは回転糸切りで、再調整は施されていない。

須恵器小型坏は、器形はコップ形を呈し、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。器面調整は、外面ではロクロ調整の後、体部下半から底部全面に回転ヘラケズリの再調整が施されており、内面ではロクロ調整である。

出土土器についてまとめると以下のような特徴が挙げられる。

- ・土師器は主に製作にロクロを使用している。
- ・土師器坏は口径に対して底径が大きく、底部の切り離しは回転糸切りで、体下部から底部にかけて回転ヘラケズリの再調整が施されている。
- ・ロクロ調整の土師器壺は大型で、器形は長胴形である。器面調整は、外面が手持ちヘラケズリ、内面がヘラナデの再調整が施され、調整前のタタキの痕跡が認められるものがある。
- ・須恵器坏の底部の切り離しは、回転糸切り無調整のものと切り離しは不明で体部下半から底部全面に回転ヘラケズリの再調整が施されるものがある。
- ・赤焼土器を含まない。

こうした特徴をもつ類例としては、土師器坏については、白石市青木遺跡第21号住居跡出土土器（小川1980b）に認められる。また、ロクロ調整の土師器壺や須恵器坏の類似する様相をもつ出土例としては、白石市家老内遺跡第2号住居跡出土土器（森1981a）、名取市清水遺跡第89号住居跡出土土器（丹羽ほか1981）、利府町大貝窯跡群5号住居跡出土土器（高橋・吉野2005）などが挙げられる。これらの土器は平安時代初頭の9世紀前葉に位置付けられていることから、S I 1堅穴住居跡出土土器の年代も9世紀前葉と考えられる。

なお、確認面で須恵器高台坏（第8図-10）、壺（第8図-11）が出土している。須恵器壺は底面に擦痕が認められ、転用硯として使用された可能性がある。これらの遺物も住居に伴う遺物と特徴に大きな差異が認められないことから、S I 1堅穴住居跡とはほぼ同時期と考えられる。

・墨書土器の類例

S I 1堅穴住居跡堆積土出土の土師器坏（第7図-1）には、底面に「千見」、「内」（異筆）の墨書が認められる。「千見」と「内」は筆跡が異なり、「内」が先に書かれている。周辺遺跡における類例をみると、墨書「千見」は宮城県内では認められない。墨書「千」は、白石市松田遺跡（丹羽1982）、青木遺跡（小川1980b）、村田町西原遺跡（熊谷1980）出土土師器などに類例がある。墨書「内」は、仙台市中在家南遺跡（工藤ほか1996）、多賀城市市川橋遺跡（佐久間・古川ほか2001）出土土師器などに類例がある。

2. 遺構について

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡1軒、土坑1基である。

(1) S I 1 竪穴住居跡

S I 1 竪穴住居跡の時期は、住居内出土土器の検討から、9世紀前葉に位置付けられた。本住居の床面北西隅で炭化材が認められ、また床面直上層に焼土や炭化材が多量に含まれることから、火災に遭っていると考えられる。さらに、床面で土器小破片を除く遺物が出土しないことから、この住居が火災に遭ったのは、機能時に使用していた遺物を持ち出した後であると推測することができる。

カマドは、天井を除く燃焼部から煙道部全体が残存しており、カマドの構造を詳細に知ることができる。ここでは、カマドの構築工程を復元し、周辺遺跡などの類例から、その特徴について検討を加える。

・カマドの構築工程について

カマドは、燃焼部から煙道部全体が石組みによって作られている。以下調査時に得られた所見から復元できた4段階の構築工程（第11図）に沿って、詳細を説明する。

①煙道・煙出しピットを掘る。

煙道部の底面が、燃焼部底面より0.1~0.2m高くなるように掘られている。

②焚口部分の両袖に袖石の据え方を掘り、礎を立てる。煙道入り口の両脇に扁平な礎を住居壁に立てかけるように設置する。

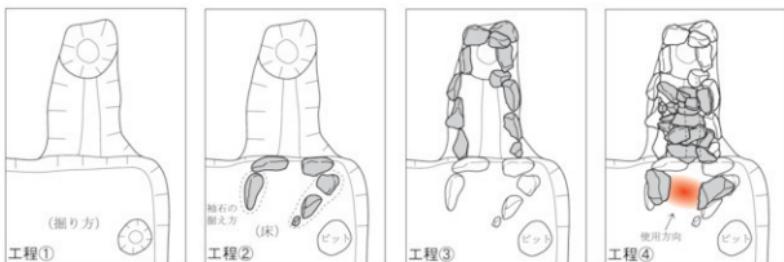
今回検出されたものは据え方に焼土を含むことから、袖石を据え直したと考えられる。煙道入り口の両脇に立てかけられた礎は、長軸70~80cmで、このカマドに使用された礎の中では最大である。

③煙道および煙出しピットの堀り方の周囲を細長い礎で囲む。

これらの礎は据え方を伴わず、掘り方に沿うように設置されている。煙出しピットの底面から上部にかけて土師器甕2点が出土しており、土器を煙道の一部として使用した可能性がある^{注1)}。

④煙道上部に扁平な礎および小礎で蓋をする。両袖の上部にも扁平な礎を置く。

天井部は残存しておらず、詳細な構造は不明であるが、燃焼部周辺には天井に使われたと考えられ



第11図 カマド構築工程模式図

る礫が落ちている。両袖の上部に粘土ブロックがわずかに残存しており、構築材に用いられた可能性がある。ただし、堆積土に粘土ブロックが認められない点、焚口周辺の礫が顕著に被熱している点から、粘土の使用は部分的だったと考えられる。焚口の向きは、右側にあるピットを避けるように、煙道の方向よりやや左側に曲がっている。

・石組みのカマドをもつ竪穴住居跡の類例

S I 1 竪穴住居跡のカマドは、燃焼部から煙道部全体が石組みによって作られている。このような構造のカマドは、県内では二屋敷遺跡第3号・第5号住居跡（加藤ほか1984）、東山遺跡第1号・第4号住居跡（真山1981）、赤鬼上遺跡竪穴住居跡（阿部・黒川1980）、下原田遺跡第4号住居跡（森1981b）、石巻市山居遺跡 S I 105 竪穴住居跡（農村ほか2006）に類例が認められる^(注2)。このうち山居遺跡 S I 105 竪穴住居跡を除く6例は、藏王町内の青麻山東麓部から愛宕山丘陵西縁部の範囲に集中しており（第12図）、いずれも平安時代（主に9世紀代）に属する。

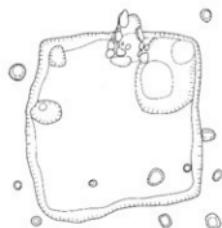
S I 1 竪穴住居跡とこれらの竪穴住居跡（第13図）^(注3)の特徴を比較したものが第1表^(注4)である。形態はおよそ方形を呈し、規模は1辺3~3.5mのものが多いが、東山遺跡第1号住居跡は1辺7.3mと大型である。カマドは各壁の中央もしくは中央付近に位置するものと、隅に寄ったものがあり、カマドの方向は標高の高い側に向くものが多く、微地形を考慮して決定されていると考えられる。燃焼部底面は幅0.4~0.8m、奥行き0.5~1.0m、煙道の長さは0.4m~2.5mで、1.2m~1.8mのものが多い。

カマドの残存状況が良い例で構築工程を検討すると、S I 1 竪穴住居跡で復元できた構築工程とおむね一致するが、二屋敷遺跡では、第3号住居跡の燃焼部側壁外側を粘土が覆うこと、第5号住居跡の煙道部天井を粘土で覆うことが指摘されており、本遺跡例と石組みを覆うために使用する粘土の量や使用箇所に違いも認められる。

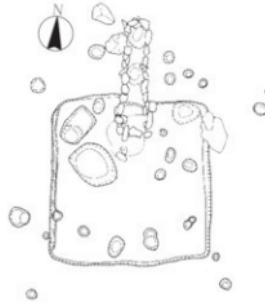
本遺跡周辺の平安時代の竪穴住居跡のカマドには、全体を石組みで作るものほかに、粘土で燃焼部を構築するものや燃焼部のみを石組みで作るものがある^(注5)。その中でカマド全体を石組みで作ものは、県内では藏王町内の青麻山東麓部から愛宕山丘陵西縁部の範囲に集中しており、この地域のカマド構造の地域性がうかがえる。



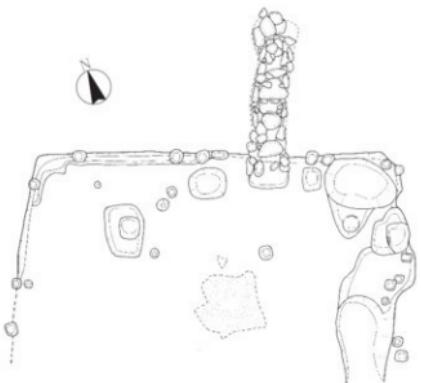
第12図 カマドをもつ住居が検出された周辺遺跡



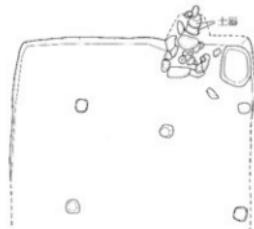
1 二星敷遺跡第3号住居跡



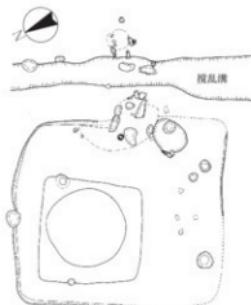
2 二星敷遺跡第5号住居跡



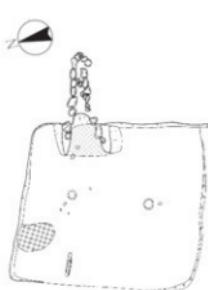
3 東山遺跡第1号住居跡



4 東山遺跡第4号住居跡



5 下原田遺跡第4号住居跡



6 赤鬼上遺跡堅穴住居跡

0 2m
(S=1/100)

第13図 カマド全体が石組みで構築された住居

第1表 全体が石組みのカマドをもつ住居属性表

遺跡・遺構名	時期	規模 (m)×(m)	面積 (m ²)	主柱穴	壁柱穴	床面	貯蔵穴	調査	カマドの位置	カマドの向き	燃焼部 底面幅 奥行き(m)	燃焼部 底面	煙道 長さ (m)	煙道下端 (m)	煙道と燃焼 部底面の 比高差(m)
觀音堂山SII	9C前	3.5×3.2	11.2	?	なし	削り方理土	カマド左	なし	北東壁東端	微地形	0.6	0.5	1.4	0.2~0.3	0.1~0.2
二層敷3号住	9C前	3.3×3.3	11.0	?	?	?	?	なし	北壁中央	東	(0.5)	1.0	—	—	—
二層敷5号住	9C前	3×3	9.0	?	?	?	?	なし	北壁中央	北	0.4	0.6	1.8	0.4	0.1
東山1号住	9C中～後	7.3×7	—	?	あり	地山	カマド右	北西隅	北壁や中東	微地形	0.8	0.6	2.5	0.2~0.3	—
東山4号住	9C中～後	4.3×7?	—	4	あり	地山	カマド右	なし	北壁や中東	微地形	0.4	0.6	0.4	0.2	—
下原田4号住	9C前～中	3.7×4.2 (15.0)	?	なし	削り方理土	カマド右	なし	東壁中央	微地形	(0.6)	(1.8)	—	—	—	
赤丸上郷六住	9C	3.2×3.5	—	2	なし	地山	—	なし	東壁北側	微地形	0.8	0.7	1.2	0.2	—

(2) SK2 土坑

SK2 土坑からは遺物は出土していないため、時期は判断できない。また、遺構の性格についても不明である。

3.まとめ

1. 観音堂山遺跡は青麻山東麓部の小丘陵上に立地する。
2. 調査の結果、平安時代初頭（9世紀前葉）の堅穴住居跡1軒、近現代の炭窯跡1基、時期不明の土坑1基を検出した。
3. S I 1 堅穴住居跡は火災住居であり、火災に遭ったのは機能時に使用していた遺物を運び出した後であると推測できる。
4. S I 1 堅穴住居跡のカマドは石組みで作られており、カマドの構造や構築工程を詳細に検討することができた。
5. S I 1 堅穴住居跡の燃焼部から煙道部全体が石組みで構築されたカマドは、青麻山東麓部や愛宕山丘陵西縁部に立地する平安時代（主に9世紀代）の遺跡に類例がみられ、カマドの構築についての地域性がうかがえる。
6. 確認調査では調査対象範囲北側で縄文時代後期前葉と考えられる縄文土器1個体がまとまって出土しており、調査区外の西側緩斜面に同時期の集落が分布する可能性がある。

註

- 註1 東山遺跡第4号住居跡は、煙道に底を抜いた土師器甕2個体を連結して使用している（真山1981）。
- 註2 煙道部の残存状況が悪く、判別できないものが数例ある。
- 註3 第13図の堅穴住居跡は、各報告書に掲載された図の縮尺を1/100に変更し、カマドの方向を図面上に変え、一部加筆・修正したものである。
- 註4 第1表は、各報告書の文章や図表の記載内容から作成したものである。数字に（ ）が付くものはおおよその推定値である。遺構の残存状況が悪く内容が不明なものは「-」、調査所見や記載内容から判断できないものは「?」で表現した。また、時期については、報告書の記述と近年の研究成果（加藤1989、丹羽1983、村田1994・1995）を踏まえて決定した。
- 註5 S I 1 堅穴住居跡とカマド構造が異なる本遺跡周辺の平安時代の堅穴住居跡を比較すると、規模・構造・施設等に大きな差異は認められない。

引用文献

- 阿部博志・黒川利司 1980「赤鬼上遺跡」「東北自動車道関係遺跡調査報告書Ⅱ」宮城県文化財調査報告書第63集
- 太田昭夫 1980a「御所内遺跡」「東北自動車道関係遺跡調査報告書Ⅲ」宮城県文化財調査報告書第63集
- 太田昭夫 1980b「大橋遺跡」「東北自動車道関係遺跡調査報告書Ⅳ」宮城県文化財調査報告書第71集
- 小川淳一 1980a「塩沢北遺跡」「東北自動車道関係遺跡調査報告書Ⅴ」宮城県文化財調査報告書第69集
- 小川淳一 1980b「青木遺跡」「東北自動車道関係遺跡調査報告書Ⅵ」宮城県文化財調査報告書第71集
- 加藤道男 1989「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』
- 加藤道男ほか 1984「二星敷遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅶ」宮城県文化財調査報告書第85集
- 工藤哲司ほか 1996「中在家南遺跡他」仙台市文化財調査報告書第213集
- 熊谷幹男 1980「西原遺跡」「東北自動車道関係遺跡調査報告書Ⅷ」宮城県文化財調査報告書第69集
- 黒川利司 1980「持長地遺跡」「東北自動車道関係遺跡調査報告書Ⅸ」宮城県文化財調査報告書第71集
- 佐久間光平・古川一明ほか 2001「市川橋遺跡の調査－県道『泉－塩釜線』開通調査報告書Ⅹ－」宮城県文化財調査報告書第184集
- 佐藤庄一 1972「家老内遺跡」「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報（白石市・柴田郡村田町地区）」宮城県文化財調査報告書第25集
- 佐藤 洋 1987「六反田遺跡Ⅲ－名取川下流域の縄文時代後期・律令時代集落跡－」仙台市文化財調査報告書第102集
- 佐藤洋一 1997「城の内遺跡」藏王町文化財調査報告書第1集
- 佐藤洋一 2007「中沢A遺跡」藏王町文化財調査報告書第5集
- 佐藤洋一 2009「青竹遺跡」藏王町文化財調査報告書第9集
- 渋谷正三 1980「明神脇遺跡」「東北自動車道関係遺跡調査報告書Ⅺ」宮城県文化財調査報告書第71集
- 白鳥良一 1971「東山遺跡」「赤鬼上遺跡」「持長地遺跡」「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報（刈田郡藏王町地区）」
宮城県文化財調査報告書第24集
- 高橋義行・吉野久美子 2005「大貝塚跡群」利府町文化財調査報告書第12集
- 田中則和 1981「六反田遺跡発掘調査報告書－名取川下流域の縄文時代中期～平安時代の集落跡－」仙台市文化財調査報告書第34集
- 千葉直樹・小野章太郎 2010「鍛冶沢遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書第222集
- 豊田幸宏ほか 2006「山居遺跡－三陟塙貢自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅵ－」宮城県文化財調査報告書第206集
- 丹羽 茂 1982「松田遺跡」「東北自動車道関係遺跡調査報告書Ⅶ」宮城県文化財調査報告書第92集
- 丹羽 茂 1983「宮前遺跡」宮城県文化財調査報告書第96集
- 丹羽 茂ほか 1981「清水遺跡」「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅷ」宮城県文化財調査報告書第77集
- 林 謙作・藤沼邦彦 1971「二星敷遺跡」「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報（刈田郡藏王町地区）」
宮城県文化財調査報告書第24集
- 藤沼邦彦 1971「下原田遺跡」「塩沢北遺跡」「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報（刈田郡藏王町地区）」
宮城県文化財調査報告書第24集
- 真山 恵 1981「家老内遺跡」「東山遺跡」「東北自動車道関係遺跡調査報告書Ⅸ」宮城県文化財調査報告書第81集
- 村田晃一 1994「藤田新田遺跡」宮城県文化財調査報告書第163集
- 村田晃一 1995「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古第36号』
- 森 貞喜 1981a「家老内遺跡」「仙南仙塩広域水道関係遺跡調査報告書Ⅰ」宮城県文化財調査報告書第79集
- 森 貞喜 1981b「下原田遺跡」「東北自動車道関係遺跡調査報告書Ⅴ」宮城県文化財調査報告書第81集

写 真 図 版



1. 観音堂山遺跡遠景（南東から）



2. 事前調査区全景（北東から）

写真図版 1 観音堂山遺跡遠景・調査区全景



1. 基本層地点④断面（北から）



2. 炭化材出土状況（南西から）



3. SI1整穴住居跡（南西から）



4. SI1整穴住居跡カマド（南西から）



5. SK2土坑南北断面（東から）



6. 縄文土器出土状況（北から）



7. 近現代の炭窯跡（南西から）

写真図版2 SI1整穴住居跡・SK2土坑ほか



1



2



3



4



5



6



7

1: 土師器壺
2: 底部墨書詳細 (縮尺等倍)
3~6: 土師器甕
7: 須恵器小型壺
(1・3~7:S=1/3)



1



2



3



4



5

1: 土師器甕

2・3: 須恵器坏

4: 須恵器高台坏

5: 須恵器蓋

(S=1/3)



6

6: 繩文土器深鉢

(S=1/4)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	かんのんどうやまいせき							
書名	観音堂山遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第227集							
著者名	古田和誠							
編集機関	宮城県教育委員会							
所在地	〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町3-8-1 TEL 022-211-3685							
発行年月日	西暦 2011年5月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	世界測地系 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因	
かんのんどうやまいせき 観音堂山遺跡	かみのくに うどくじょうざいせき 刈田郡蔵王町 よしむら くわうまち 曲竹字觀音堂山	刈田郡蔵王町 よしむら くわうまち 043010	05202	38度 04分 20秒	140度 38分 19秒	2010.09.06 ～10.15	確認調査 2,100m ² 事前調査 1,200m ² (6,000m ²)	広域營農団地 農道整備事業 に伴う確認 事前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
観音堂山遺跡	集落・散布地	繩文時代後期・ 平安時代	堅穴住居跡・土坑	繩文土器・土師器・ 須恵器				
要約	<p>観音堂山遺跡は、刈田郡蔵王町曲竹字觀音堂山に所在し、青麻山から延びる丘陵上に位置する。今回の調査では、古代の堅穴住居跡1軒、近現代の炭窯跡1基、時期不明の土坑1基を検出した。</p> <p>堅穴住居跡は、出土遺物から9世紀前葉に位置付けられる。燃焼部から煙道部全体が石組みで作られたカマドは、燃焼部天井を除く大部分が残存しており、構造や構築工程を詳細に検討することができた。</p> <p>確認調査では調査対象範囲北側で繩文時代後期前葉と考えられる土器1個体が出土しており、調査区外の西側斜面に同時期の集落が分布する可能性がある。</p>							

宮城県文化財調査報告書第227集

観音堂山遺跡

平成23年5月25日印刷

平成23年5月31日発行

発行 宮城県教育委員会
仙台市青葉区本町三丁目8番1号
